

日本語教師による学習語彙選定と外国人留学生の未知語 ——「社会学入門」のテキストを題材に——

小竹 直子

はじめに

大学で日本語を使って専門的な学習や研究をしようとする日本語学習者にとって、専門的な語彙の知識不足が大きな障壁となると予想される。しかし、学習者の専門分野に精通していない日本語教師がその分野の専門語彙を特定し、指導することには限界がある。そこで近年では、その分野の学術論文や資格試験の過去問題などをデータベース化し、出現頻度などをもとに専門語の抽出を行う研究が数多く行われ、方法論が確立しつつある。それによって、客観的に専門語を特定する手段があれば、日本語教師が教師主導型で指導するよりも、学習者自身が専門語彙の抽出やリスト化をして学習したほうが効率的であると、学習者による自己主導型学習が提案されるようになった（伊藤 2014）。さらに言えば、専門語の特定だけでなく、作成された専門語のリストを教育に応用するにも、日本語教師だけでは適切な例文を示すのが難しいため、当該分野の専門家の協力が欠かせないとも指摘されている（松下 2017）。このように、専門日本語教育における語彙学習支援では、門外漢の日本語教師が貢献できる範囲は限定的であるとの指摘がなされている。しかし、そのように日本語教師による指導の限界が指摘される一方で、逆に日本語教師が専門日本語の語彙学習支援においてどのような貢献ができ

るのかについての究明は管見の限り十分になされていないと思われる。

伊藤(2014, p.25)では、何らかの専門分野を持つ日本語学習者にとって日本語で書かれた文献の内容をいかに早く読み取れるかが大きな課題であって、その分野の専門語彙の全体像を知ることではないと指摘している。すなわち、学習者はその分野で使用頻度の高い語のリストを示されるよりも、今読んでいる文献に出ている専門語彙の意味が知りたいというのが学習者の本音だろうというわけである。伊藤(2014)では、このことを学習者による自己主導型学習が有効である根拠としている¹⁾が、本稿ではむしろ、ある特定の文献を読むという目的がはっきりしているのであれば、かえって日本語教師が支援しやすいのではないかと考える。当該の専門分野については門外漢であっても、日本語教師はこれまでの日本語教授経験から学習者が理解に困難を覚える語彙をある程度予測することができるかと考えるからである。たとえば、文法指導であれば、学習者の母語との違いや学習者の誤用分析から学習困難点を予測して、指導に活かすことができる。そうであれば語彙指導においても、学習者の言語や文化から推測して、学習者が理解に困難を覚える語を予想し、指導に反映することができるのではないだろうか。そういう意味で、日本語教師の経験が専門日本語の語彙学習支援に寄与する余地は大いにあるのではないかと本稿では考える。

また、そもそも特定の専門分野の学習語彙が特定できさえすれば、学習者は日本語で専門的な学習や研究が行えるようになるのか、という疑問も残る。学習者が読まなければならない文献を理解するうえで問題となるのは専門用語だけであろうか。そうであれば、専門用語について一般語を使って説明してある日本語の解説書があれば、理解を誤ることはないはずである。筆者は、大学の学部で学ぶ留学生に日本語を教えてきた経験から、専門用語について解説してある、いわゆる「入門書」であっても、留学生にとって理解が難しいということは大いにあり得ると考える。「入門書」は専門日本語の領域とは言えないという反論もあろうかと思われるが、本稿では、「入門書」を読む段階の専門日本語教育が一番の課題であると考え。なぜなら、

一般に大学（学部）への入学に必要な日本語能力は日本語能力試験旧2級以上だと考えられており、実際に旧2級レベルに達していれば日本語を使って専門的な学びを始めることができるのが実情であるが、そのレベルの学習者にとっても専門科目のテキストとされる「入門書」には日本語能力試験の級外の語彙や文型が多く含まれており、その読解は容易ではないと考えられるからである。拙著（2017）では、学部1年生を対象とする「経営学総論」のテキストには日本語能力試験の級外の語彙が8.3%、級外の文型が23.6%含まれていることを報告している。つまり、旧1級レベルでもカバーしきれない語彙・文型が含まれたテキストを大学に入るとすぐに読まなければならないのが現実であるということである。そうであれば、専門的な学びを始めたばかりの留学生の学習支援こそが専門日本語の大きな課題であり、そこにこそ日本語教師の支援が必要ではないかというのが本研究の提起する問題である。

以上で述べたように、専門日本語の語彙学習において日本語教師が支援できる範囲が限定されすぎているのではないかという問題意識に基づいて、本稿では専門日本語の初期の段階、すなわち学部1年生のための専門日本語教育で日本語教師が支援できることがあるのではないかという仮説を検証したい。

第一章 専門日本語教育における 学習語彙選定に関する先行研究

専門日本語教育における語彙指導に関する先行研究では、学すべき語彙（シラバス）の特定が大きな研究課題となっている。そのため、ある特定の専門分野や資格試験（介護福祉士国家試験、看護師国家試験、医師国家試験、など）を対象を絞って、高頻出語を抽出し、語彙リスト化する研究が数多く発表されている（小宮 1997、小宮・横田 2002、小宮 2005、野村・川村・斉木・金庭 2011、野村・川村 2011、中川・齊藤 2014、今村 2014、岩田

2014、水崎 2015、佐野 2016、小宮 2017、小宮 2018a、小宮 2018b、山元・稲田・品川 2020、など)。これらの研究では、特定の分野の文献・資料や資格試験問題に高頻度で出現する語彙を調べ、日本語能力試験の『出題基準』に掲載がある語彙と比較したうえで、その分野独自の専門語を特定しているものが多い。しかし、実際に学習者がどのような語につまずき、理解に困難を感じるのかを調査・分析した研究は、管見の限り、野田 (2014)、加藤 (2017) の二つの研究を数えるばかりで、まだ少ないのが現状である。

本稿では、日本語教師は学習者の理解困難語をある程度予測できるのではないかという予想のもとに、専門日本語教育における学習語彙選定に日本語教師が貢献できる可能性を探る。その本研究の研究課題にアプローチするうえで重要な手掛かりとなる学習者のつまずきに関する二つの先行研究をここで概観し、本研究が明らかにすべき問題を明確化する。

1-1. 上級日本語学習者が学術論文を読むときのつまずき

野田 (2014) では、上級日本語学習者が日本語で書かれた自分の専門分野の学術論文を読む際に、どのようにその内容を理解しているかを調査し、不適切な理解をしてしまう原因を指摘している。語の理解に失敗する原因として、野田 (2014, p10) では次のように指摘している。すなわち、上級日本語学習者はわからない語句の意味を推測するときに、自分の持っている既有知識に合うように不適切に推測してしまい、内容理解に失敗することがあるという。具体的に野田 (2014, p.10) で挙げられている例を見ると、誤って推測してしまった語として、以下の文章の中の「マイナー」「大立て者」が挙げられている。

- (1) だが、『露骨なる描写』で比較的マイナーなモーパッサンをもちださず、「イブセン [イブセン] を見よ、トルストイを見よ、ゾラを見よ、ドフトエフスキーを見よ」と「泰西革新派」の大立て者だけをもちだしたのはマニフェストに適した、花袋の賢明な配慮として

評価できる。(稲垣直樹「モーパッサン受容の一局面―田山花袋『蒲団』を読み直す―」『比較文学』36、1993)

(野田 2014、p.10 下線は筆者による)

この調査においては、学習者は「マイナー」を「小さい、小規模」、「大立て者」を「大人物」と理解し、自分自身の既有知識である「モーパッサンは短編が多く、ゾラやドフトエフスキーは長編が多い」という知識と合わせて、次のように誤解してしまったと報告されている。すなわち、「比較的短編が多いモーパッサンをもちださず、長編が多いゾラやドフトエフスキーをもちだしたことは評価できる」と学習者は理解したのだが、実際には「ゾラやドフトエフスキーのような文壇で本流である者だけをもちだし、本流からやや外れているモーパッサンをもちださなかったことは評価できる」と理解すべき文章であり、不適切な推測になってしまったと指摘されている。野田(2014)では、他にも文の構造を不適切に捉えてしまった例や既有知識に影響されて文の理解を間違ってしまった例が挙げられているが、語の理解についての誤りの例は上述の(1)一つしか挙げられていない。そのため、どのような語が学習者のつまずきとなるのかという問題に答えられるものではないが、野田(2014)が指摘した事実は、専門語の選定と教育ではカバーしきれない問題点を示しているように思われる。すなわち、(1)の例に見られるように、おそらく文学の専門と思われるこの学習者が、必ずしも文学の専門用語についてだけ誤った理解をしてしまうのではなく、「マイナー」のような一般の語、さらに言えば意味を知らないわけではない語について解釈を誤ってしまうことがあるという問題点である。野田(2014)が示した問題点は、学習者にその分野に特有の専門語を特定して示すだけでは不十分で既知の語を含めた専門的なテキスト全体の理解を支援する必要性があることを示唆しており、専門日本語教育における語彙指導の在り方に重要な視点をもちたと言えらる。そして、文章全体の理解を支援する場においては日本語教育の専門家が貢献できる可能性は大いにあると考えられる。野田(2014)では、明らかになった問題点を解決するために、学習者の読解技術の解明と未

知語に対する適切な推測ストラテジーを教育する必要性を訴えているが、本稿ではそれに加えて、専門的な文章の理解を支援するための語彙指導の在り方を研究することも大変重要な課題だと考える。学習者がある特定の分野の文献を読むとする場合に、その分野において高頻度で使われる専門語の意味を知っているだけでは十分ではなく、専門語か一般語かの別なく、その文献の理解に必要な語をその文脈において正しく理解する力が必要になる。そのためには、理解につまずく原因となる語を予測することが専門日本語教育でも非常に重要であり、日本語教師の経験がその点で役に立つと本稿では考える。

1-2. 看護師候補者たちが看護師国家試験で誤答を選んでしまう原因

加藤（2017）では、経済連携協定（EPA）により受け入れている外国人看護師候補者が看護師国家試験を受ける際、どのような原因で誤答を選んでしまうのかを調べ、日本語教育の立場からの支援の必要性を訴えている。加藤（2017）は、元 EPA 看護師候補者（以下、「元候補者」）の3名に看護師国家試験の過去問題3年分を解かせ、誤答となった問題について元候補者と話合った際の会話の録音データを分析し、誤答の原因を追究した。その結果、語彙に関しては、明らかに医学・看護分野に特有な専門語だけでなく、「吸い殻」や「戸締り」「文房具」といった一般語の意味がわからないことが誤答の原因となる場合があることがわかった（加藤 2017, p.37）。「吸い殻」「戸締り」「文房具」のような語は一般的な日本語の教科書では扱われることが少ないと加藤（2017, p.43）では指摘している。そして、日本語母語話者にとっては非常に日常的な語彙であるため、これらの語の理解が誤答の原因となることを日本語教師ではない支援者が予測しにくいと考察している。

また、「助長する」を単漢字の知識から推測して「長く助ける」意味だと解釈してしまったために、「頭蓋内圧亢進を助長するものはどれか」という設問で「悪化させる要因」を選ばず、「頭蓋内圧亢進」を助けるもの、すなわち「抑制するもの」を選んでしまったことが報告されている（加藤 2017、

p.38)。さらに、加藤（2017、p.39、p.43）では、日本語母語話者にとっては当たり前理解している日本の文化的・習慣的な知識に欠けていることが誤答原因になることも指摘されている。たとえば、「常勤」や「非常勤」という語は、日本の職場環境では「常勤の医師」「非常勤の医師」といった人を表す意味で使われることが多いが、元候補者は「指定介護老人福祉施設の医師、1人（非常勤可）」という記述を「いつも医者がいる状態（＝常勤）ではない場合（＝非常勤）も良い」という意味だと誤って理解していたことが報告されている。これらの漢字語彙の誤った推測や日本文化の知識の欠如といった問題は、必ずしも看護師国家試験の誤答に限定される問題ではなく、一般の日本語学習においても問題となることだと考えられる。

以上のことから加藤（2017、p.44）では、非日本語母語話者である EPA 看護師候補者が看護師国家試験の内容をきちんと理解し、正答が選べるように指導するためには、医学・看護学の専門家だけでは不十分で、日本語教師の視点が必要であると結論付けている。このことは、大学における専門的な学習・研究にも当てはまると考えられる。すなわち、大学で学ぶ留学生にとって問題となるのは必ずしもその分野の専門語だけではなく、日本語学習者が一般に理解しにくい語や解釈を誤りやすい語が専門的な文章の理解や、試験問題の理解のつまずきとなり得るということである。そうであれば、日本語教師が専門日本語教育における語彙学習支援に貢献できる余地は大いにあると思われる。すなわち、日本語学習者が専門的な文章を読む際にその分野の専門語以外で理解につまずきやすい語を、日本語教師は経験から推測することができると考えられるからである。つまり、加藤（2017）は、専門日本語教育においても一般語の学習は重要であり、専門的な文章の中で理解につまずく一般語を特定し、学習の必要性を指摘することは日本語教師が果たすべき役割であることを示唆していると言える。

そこで、本研究の研究課題を以下のように設定する。すなわち、学習者が専門的な文章の読解を必要とする際に、日本語教師が本当に学習者がつまずきやすい語を予測することができるのかを検証することである。それが検証

できれば、日本語による専門的な文章の読解のための語彙学習において日本語教師が支援できること、そして、日本語教授経験のない当該分野の専門家や学習者自身ではカバーできない部分を日本語教師が補える可能性を示すことになる。特に本稿は、大学での専門的な学習のために読むテキストや資料の読解を支援する語彙指導に焦点を当てる。それは筆者が担当している学部留学生のための日本語教育において大きな課題となっているからである。多くの留学生は、大学入学試験に合格できるレベルの日本語能力に達していたとしても、日本人学生と同じように日本語で専門的な内容を学ぶのに十分な日本語能力を身につけているわけではない。学部に入ってから日本語学習によって徐々に専門的な日本語を理解するようになる。筆者は、学部1年生の留学生を対象とした日本語科目を担当しているが、そこで強く意識していることは専門教育への橋渡しである。ただ、1年生であっても彼らはすでに大学生であり、入門的な学びとは言え、それぞれの専門の内容を日本人学生に交じって学ばなければならない。したがって、学部1年生は大学の授業で要求される日本語のレベルと自分自身の日本語能力のギャップに悩まされることになる。したがって、学部1年生にこそ専門日本語の語彙学習支援が必要だと考え、彼らが必修科目として学ばなければならない専門科目のテキストを題材として、日本語教師による語彙学習支援の可能性に具体的にアプローチしていきたい。

第二章 日本語教師による学習語彙選定と 留学生の未知語に関する調査

本研究の大きな目標は、日本語教師による効果的な専門語彙学習支援のあり方を探ることであり、本調査はそのための前提として、日本語教師は大学で専門的な文章を読むために学習者が学ぶべき語彙を特定できるのかという疑問を明らかにするものである。本研究で言う学ぶべき語彙の特定とは、当該の専門分野における専門語の特定ではなく、特定の専門書や学術論文を読

むうえで学習者がつまづく語、すなわち意味を知らない語や正確に理解するのが難しい語を特定することを指す。筆者が所属する大学では幸いなことに、学部ごとの日本語科目が設置されているため、留学生が読むべき文献を日本語科目で取り上げやすく、実際に国際関係学部教授田部井圭子氏は、当該学部の専門科目の教科書を題材に日本語指導を実践して、成果を挙げている²⁾。本研究ではそのような環境を利用して、日本語教師が留学生にとっての未知語や理解困難語を特定できるかどうかを調査した。以下では、「調査の目的」「調査に使用したテキスト」「調査の方法」「調査協力者」「調査時期」「結果の分析方法」の順に調査の概要を報告していく。

(1) 調査の目的：

本調査の目的は、日本語教師はあるレベルの日本語学習者が日本語で書かれた特定のテキストを読むために学んでおくべき語を経験に基づいて推定でき、それらの語は当該レベルの日本語学習者が意味をよく知らない語や理解できない語と高い確率で重なるのではないかという本稿の仮説を検証することである。そこで本研究が行う調査は、日本語教師に学ぶべき語かどうかを評価してもらう調査1と外国人留学生に意味を知っているか意味を推測できるかを評価してもらう調査2に分かれる。

(2) 調査に使用したテキスト：

本調査では、報告者が所属する国際関係学部多文化コミュニケーション学科の1年生の必修科目である「社会学入門」の指定教科書『社会学がわかる事典』（森下伸也著、日本実業出版社、2000年）の一節を調査対象として取り上げる。「社会学入門」では、各回の授業の前に事前学習として指定教科書の指定箇所を読んで課題に答えることが求められている（2020年度「事前学習リスト4／17Ver」より³⁾）。いわゆる専門書ではなく初学者向けの入門書を扱う理由は、「社会学」の概念を一般的な言葉で説明する文章が外国人留学生にとって必ずしも理解しやすいとは言えないと考えるからである。

たとえば、「準拠集団」という概念を説明する文章で、友達が持っているブランド物を親にせがむ娘の例が出てくるが、この状況は生まれ育った社会で類似の現象がある場合には理解の助けになるが、異なる社会的背景を持った外国人留学生には理解しにくい場合もあるのではないだろうか。また、「夏目漱石の『こころ』にたとえば、Kは先生の準拠集団である」という記述がある。『こころ』を読んでいなければ、ピンと来ないたとえであるが、それ以前に「夏目漱石」を知らなければ、「『こころ』にたとえる」の意味さえつかめないだろう。このように、日本事情に精通していない留学生が、日本社会での共通理解をベースに新しい概念を獲得していくのは、困難な作業ではないかと予想される。したがって、日本語教師が留学生の専門学習を支援するとすれば、「社会学」の概念を日本社会をベースに学ぶ場合のように、新規概念を理解する際にこそ日本語教師が活躍できるのではないかと筆者は考える。そこで、上述の「社会学入門」のテキストを題材に、留学生が社会学の専門用語の意味を理解しようとする際に、日本語教師が支援を必要とする語、すなわち学習語を特定できるかどうかを調べたい。具体的な文章は(2)の「調査の方法」で示すが、『社会学がわかる事典』(上述)の42頁から44頁の「人間は比較のなかを生活している」という一節を読み、「あなたにとっての比較の準拠集団、同調の準拠集団について、小学生のころと現在と、具体例を挙げて比較しなさい」という事前課題を遂行するための語彙学習支援を考えたい。それは「比較の準拠集団」「同調の準拠集団」という概念を自分に当てはめて適切な具体例を挙げるという課題なら、留学生が「準拠集団」の概念をよく理解できているかどうか、社会学の専門家ではない筆者でも判断しやすいと考えたからである。

(3) 調査の方法

ここでは、調査1(日本語教師を対象とする調査)と調査2(日本語学習者を対象とする調査)の調査方法を順番に説明していく。まず調査1では、以下の条件で日本語教師に大学学部留学生にとって学習が必要な語かどうかを

判定・評価してもらった。

【条件】

- ① 日本語能力試験 N1 に全員合格している 15 名の大学学部留学生のクラスで専門教育への橋渡しを目的とした 1 年次の日本語読解科目を指導している。
- ② 対象学生は、漢字圏・非漢字圏混合クラスで、国籍・母語もバラバラである。
- ③ 対象学生は、A 大学国際関係学部にも所属しており、「社会学入門」を 1 年次の必修科目として履修しなければならない。
- ④ 「社会学入門」で用いられている『社会学がわかる辞典』（森下伸也著、日本実業出版社、2000 年）の一部（別紙資料①）を読解教材として取り上げ、対象学生が下記の「社会学入門」の課題に答えられるよう支援する。

【「社会学入門」の課題】

あなたにとっての比較の準拠集団、同調の準拠集団について、小学生のころと現在と、具体例を挙げて比較すること

- ⑤ 別紙資料①のテキストを読ませる授業のための予習教材として、20 語程度選択してリスト化し、対象学生に配付する。
- ⑥ 対象学生には、その 20 語のリストの中でわからない語について、自分で辞書等を使って意味を調べるよう指示する。
- ⑦ 語彙リストを作る際に、あらかじめ日本語能力試験の出題基準に記載がない「級外」の語を調べたところ、38 語あった。これを「語彙候補（別紙資料②）」とする。

上記の条件で語彙リストを作成することを想定して、別紙資料②の各語について語彙リストに加える必要性を、最も必要ないの「1」から最も必要だと考えるの「7」までの 7 段階で評価し、数字を回答してもらった。以下に、別紙資料①のテキストと別紙資料②の候補語彙を示す。

別紙資料①「人間は比較のなかを生きている」

「友達はみんなヴィトン⁽¹⁾ なんだから、私にも買ってよ」と親にせがむ⁽²⁾ 娘。「お隣⁽³⁾ の奥さん、素適な指輪してるのよ。私も欲しいわ」と夫にねだる妻。「(人気歌手の) ○×△みたいにやってよ」と美容師⁽⁴⁾ に注文する青年…。

「友達」や「隣の奥さん」や「○×△」みたいに、だれかにとって欲求⁽⁵⁾ のモデルとなるひとのことを準拠集団⁽⁶⁾ と呼ぶ。夏目漱石⁽⁷⁾ の『ころろ』にたとえば、Kは先生の準拠集団である。こうして後天的⁽⁸⁾ 欲求の多くは、自分のオリジナル⁽⁹⁾ の欲求ではなく、準拠集団を無意識⁽¹⁰⁾ のうちに模倣することによって形成される。ひとはひとまねで欲求を学ぶのだ。

《比較の準拠集団》準拠集団はひとが自分の幸不幸、満足と不満足⁽¹¹⁾ をおしはかる⁽¹²⁾ 目安にもなる。ひとはそうした目安を自分でオリジナルにもっているわけではなく、準拠集団と自分を比較することで、幸不幸をおしはかっていることが実に多い。たとえば、それなりにレベルの高い大学に合格して気分よくしているところに、学力レベルがおなじくらいの友人がもっとレベルの高い大学に合格したことを聞いたら、その瞬間、気分は暗転して⁽¹³⁾ 減入って⁽¹⁴⁾ しまう。会社員が自分の地位と収入に十分満足していても、大学時代の友人と会って、会社も地位もおなじくらいのレベルなのに、彼のほうが収入が断然いいと知ると、ガックリ⁽¹⁵⁾ きてしまう。

このように、他人が自分より幸福だと自分を不幸と感じてしまうことを相対的不満(相対的剥奪⁽¹⁶⁾)とよぶ。逆もまた真なりで、「他人の不幸はカモ⁽¹⁷⁾ の味」と言われるように、他人が自分より不幸だと何だか幸福になったように錯覚してしまう習性⁽¹⁸⁾ が人間にはある。なかなか恋人が得られない女性が、友人が最近恋人と別れたと知って感じる幸福感。海外旅行で金銭をスラれた⁽¹⁹⁾ 会社員が、パスポートをスラれた同僚の話聞いて感じる一種の安らぎ⁽²⁰⁾。

停車中の電車に座っていると、隣の電車が前方⁽²¹⁾ に動くと自分の電車が後方⁽²²⁾ に動き、後方に動くと前方に動いているような錯覚におちいる⁽²³⁾

が、それときわめてよく似た現象である。あまりほめられたことではないが、ともかくひとはこうして比較のなかを生きている。

ひとがそうして比較の対象とする準拠集団には、自分の所属する集団（友人、家族、同級生⁽²⁴⁾、同僚、近隣⁽²⁵⁾ 集団など）、また自分とおなじ属性⁽²⁶⁾（社会階層、年齢、性、職業、学歴など）の人間たちが選ばれやすい。たとえば皇族⁽²⁷⁾ やプロ野球のスター選手は、一般の会社員にとっては生活ぶりがあまりにちがいきすぎ、比較の対象にならないのだ。

《同調の準拠集団》欲求がそうであるように、ひとは自分の意見や態度を自分で主体的に考えてきめるのではなく、無意識のうちに準拠集団に同調することできめていくことが多い。

「今日の選挙、何党に入れる？」と妻に聞く夫。「遠足にどんなお菓子もっていく？」と同級生に聞く小学生。「明日の会議、どういうスタンス⁽²⁸⁾ でゆかれます？」と上司に聞く部下。同調の対象となる準拠集団としては、やはり自分の所属する集団や自分と同じ属性の人間が選ばれやすいが、比較の準拠集団とくらべて、それ以外の人間たちが選ばれることがはるかに多い。

たとえば、マス・メディア⁽²⁹⁾。ひとは、いつも見ているテレビ番組や、毎日読んでいる新聞の論調⁽³⁰⁾ に知らず知らず同調し、おなじような見方をするようになる。態度をきめかねている問題に、メディアがご託宣⁽³¹⁾ をあたえる場合もある。尊敬する作家、好みの評論家、アイドル⁽³²⁾・タレント、あるいは将来そうになりたい極道⁽³³⁾ たち。内容のよしあしはべつにして、彼らが自分の意見や態度やライフスタイル⁽³⁴⁾ のモデルになる。

ちょっと変わったところでは、他人が「こいつ⁽³⁵⁾ のマネ⁽³⁶⁾ だけはしたくない」なんていう反面教師型・反発型のモデルとなる場合もありえよう。親のようにだけはなりたくない子供。自分とおなじようなネクタイをしているだけでムカツク⁽³⁷⁾ 同僚。これは同調の準拠集団に特徴的に見られる現象だが、やはり準拠集団の変種⁽³⁸⁾ とみなすことができる。

（『社会学がわかる辞典』p.42～44 より引用）

別紙資料②「語彙候補」

1. ヴィトン	20. 安らぎ
2. せがむ	21. 前方
3. お隣	22. 後方
4. 美容師	23. おちいる
5. 欲求	24. 同級生
6. 準拠集団	25. 近隣
7. 夏目漱石	26. 属性
8. 後天的	27. 皇族
9. オリジナル	28. スタンス
10. 無意識	29. マス・メディア
11. 不満足	30. 論調
12. おしはかる	31. ご託宣
13. 暗転する	32. アイドル
14. 滅入る	33. 極道
15. ガックリ（くる）	34. ライフスタイル
16. 剥奪	35. こいつ
17. カモ	36. マネ
18. 習性	37. ムカつく
19. （金銭を）スラれる	38. 変種

また、以下の2つの自由記述回答の質問を設けた。回答は必須とした。

質問1. あなたは大学学部留学生を対象とする日本語読解指導において語彙リストを作成する際、どのような方法で、または、どのような基準で語彙を選択しますか。

質問2. あなたが大学学部留学生を対象とする日本語読解指導において、語彙リストの作成以外で、学生の学びにとって重要だとお考えのことは何ですか。

以上が日本語教師を対象とする調査1の方法である。

次に、日本語学習者を対象とする調査2の調査方法について説明するが、使用した題材は調査1と同様である。すなわち、同じテキスト（別紙資料

①)と「候補語彙(別紙資料②)」を使って、別紙資料①の「人間は比較の中を生活している」という文章を読んで、以下の課題に答えなければならないという設定で、文章の中に含まれる38の語(別紙資料②「語彙候補」)について、どの程度知っているか、推測できるかを、次のような基準で1から7の7段階で評価してもらった。

【課題】((3)の④の「社会学入門の課題」と同じ)

あなたにとっての比較の準拠集団、同調の準拠集団について、小学生のころと現在と、具体例を挙げて比較すること

評価の基準は以下のとおりで、その後の意味を知っているか、意味を推測できるかを1から7の7段階で評価してもらった。

- 1・・・知らない言葉で意味がぜんぜん理解できない
- 2・・・知らない言葉だが、意味は少し想像できる
- 3・・・知らない言葉だが、意味は推測できる
- 4・・・知っている言葉だが、意味は完全にはわからない
- 5・・・知っている言葉で、意味はだいたいわかる
- 6・・・知っている言葉で、意味がわかる
- 7・・・よく知っている言葉で、意味の理解はまったく問題ない

本調査で「語彙候補」をあらかじめ絞った理由は、本調査は日本語教師と学習者が同一の語についてどう評価するかを比較することを目的としているからである。

外国人留学生に対しては、各語の評価を入力してもらった後、上記の「社会学入門」の課題に答えてもらい、その後で調査協力者の留学生自身について以下のような質問に答えてもらった。すなわち、出身地や母語、学部・学科・学年、「社会学入門(担当教員:栗原孝先生)」を受講したことがあるかどうか、日本語能力試験で合格した級、TOEICの最高スコアについての質問に答えてもらった。そして、「あなたが大学で専門の科目を勉強するとき、難しい点はどんなことですか?難しいと思うことすべてにチェックしてください」という質問に対して複数選択で答えてもらった。選択肢は以下のとお

りである。回答は必須とした。

選択肢 1. 専門用語が理解できない

選択肢 2. 先生の講義が聞き取れない

選択肢 3. テキストが難しくて、読んでも理解できない

選択肢 4. 課題やテストが難しくて、どのように答えたらいいかわからない

選択肢 5. 勉強の方法がわからない

選択肢 6. その他

なお、本調査は Google Forms で作成した Web 上のアンケートフォームを使った質問紙調査で、調査協力者に対して時間制限を設けずに回答してもらった⁴⁾。

(4) 調査協力者：

本調査に協力していただいた協力者は以下のとおりである。

調査 1：大学の学部留学生に対する日本語教授経験を持つ日本語教師 6 名

6 名の日本語教師に大学での日本語指導歴は、1 年 6 か月から 25 年までかなりの幅があり、読解指導経験の有無や読解指導のための語彙リストの作成経験の有無にも差がある。そのような条件では、より多くの調査協力者を必要とするのであるが、大学での日本語教授経験を持つ教師の協力者を多数確保することは非常に困難であるため、調査結果の一般化には慎重さを要するものの、日本語教師が選ぶ学習語彙と日本語学習者の未知語との一致率を確かめる調査目的は果たせると判断し、調査を進める。

調査 2：日本語能力試験 N2 合格以上の日本語レベルを持つ学部 2 年生から 4 年生までの外国人留学生 9 名

実際には 11 名の協力者からの回答を得たが、日本語能力試験 N2 に合格していない 1 名は、大学学部留学生の一般の日本語レベルに達していない可能性があるため排除した。さらに、本調査で使用する「社会学入門」のテキストを読んだことがある、「社会学入門」の履修経験者 1 名を排除して、日本語能力レベルと社会学の背景知識のレベルがある程度均一とみなせる 9 名

の回答を分析対象とした。なお、この9名のうち2名が日本語能力試験N1合格者で、7名がN2合格者であった。全員が同じ大学に所属する留学生であるが、所属は3つの異なる学部に分かれる。ただし、いずれも文系学部である。出身国別の人数は、ベトナム6名、フィリピン1名、マレーシア1名、タイ1名であった。外国人留学生の調査協力者も調査1の日本語教師と同様に結果を一般化するにはあまりに限られた人数ではあるが、同じ大学の文系学部所属の留学生であり、当該大学での日本語指導に活かす目的にとっては、実際の状況に近いというメリットもある。

(5) 調査時期：

調査1、2とも、2021年3月24日～2021年4月10日に行った。

(6) 調査の結果：

ここでは(5)までに述べた手順によって行われた調査の結果を報告する。まず、調査1と調査2の結果を比較しやすくするために、評価1の評定値を調査2に合わせて読み替える必要がある。調査1では、日本語教師に語彙候補の38語について「学習語彙リストに加える必要性の高さ」を評定してもらったが、調査2では、留学生に「その語を知っているか、推測できるか」という「理解・推測可能度の高さ」を評定してもらった。つまり、日本語教師は、学習者が知らない、あるいは理解が十分ではないと予想される語を学習語彙に加える必要があると判断するため、最も必要ない「1」は留学生がよく知っていると判断した語、最も必要だと判断した「7」は留学生がよく知らないか、推測できないと判断した語ということになる。したがって、調査1の「学習の必要性の高さ」1～7は、調査2の「留学生の理解・推測可能性」7～1に置き換えることができる。そこで、調査1の評定値を7→1、6→2、5→3、4→4、3→5、2→6、1→7」と読み替えて結果を示す。

まず、日本語教師6名による候補語38語に対する評定値は、最高値が3.7、最低値が2.9で平均3.2であった。一方、留学生9名の評定値は、最高値が

5.6、最低値が4.8で平均が5.3であった。このことから、同じ語に対して日本語教師は理解・推測が難しいだろうと推測する傾向にあり、留学生は理解・推測できると考える傾向があったことがわかる。

次に、候補語彙38語それぞれに対する外国人留学生と日本語教師の平均評定値を表1に示す。

表1：各候補語の外国人留学生と日本語教師の平均評定値

候補語彙	外国人留学生 平均評定値	日本語教師 平均評定値	差
1. ヴィトン	3.3	4.5	-1.2
2. せがむ	2.7	2.8	-0.2
3. お隣	6.8	5.0	+1.8
4. 美容師	6.9	4.7	+2.2
5. 欲求	6.8	2.7	+4.1
6. 準拠集団	4.2	4.5	-0.3
7. 夏目漱石	3.9	3.7	+0.2
8. 後天的	3.7	3.0	+0.7
9. オリジナル	7.0	2.8	+4.2
10. 無意識	6.6	3.2	+3.4
11. 不満足	7.0	4.2	+2.8
12. おしはかる	3.8	2.5	+1.3
13. 暗転する	4.3	3.3	+1.0
14. 減入る	3.1	2.2	+0.9
15. ガックリ（くる）	4.1	2.5	+1.6
16. 剥奪	2.1	2.7	-0.6
17. カモ	4.2	4.0	+0.2
18. 習性	5.7	2.3	+3.3
19. （金銭を）スラれる	4.7	3.7	+1.0
20. 安らぎ	3.8	2.5	+1.3
21. 前方	6.7	4.0	+2.7
22. 後方	6.7	4.0	+2.7
23. おちいる	5.7	2.3	+3.3
24. 同級生	7.0	4.8	+2.2
25. 近隣	7.0	3.5	+3.5
26. 属性	6.6	2.2	+4.4

27. 皇族	5.9	3.0	+2.9
28. スタンス	3.7	2.2	+1.5
29. マス・メディア	6.9	1.7	+5.2
30. 論調	4.4	2.8	+1.6
31. ご託宣	3.1	4.2	-1.1
32. アイドル	7.0	2.7	+4.3
33. 極道	3.6	3.0	+0.6
34. ライフスタイル	7.0	2.2	+4.8
35. こいつ	6.9	3.7	+3.2
36. マネ	6.9	3.0	+3.9
37. ムカツク	6.3	3.2	+3.2
38. 変種	5.3	2.3	+3.0

表1を見ると、留学生と日本語教師の平均評定値の差が最も大きい語は「マス・メディア」で、留学生の平均評定値が6.9、日本語教師の平均評定値が1.7であった。すなわち、「マス・メディア」という語に対して留学生はほぼ「よく知っている、意味の理解は問題ない」と判断しているのに対し、日本語教師は学習が必要な語だと判断したことになる。評定値の差が4.0以上と差が大きかった語、評定値の差が2.0以下と差が小さかった語、その中間の語の3つに分けると、表2のようになる。

表2：留学生と日本語教師の評定値の差による語の分類

留学生と日本語教師の評定値の差が大きかった語 (差 4.0 以上の語)	欲求、属性、マス・メディア、アイドル、ライフスタイル (6 語)
留学生と日本語教師の評定値の差が小さかった語 (差 2.0 以下の語)	ヴィトン、セガむ、お隣、準拠集団、夏目漱石、後天的、おしはかる、暗転する、滅入る、ガックリ (くる)、剥奪、カモ、(金銭を) スラれる、安らぎ、スタンス、論調、ご託宣、極道 (18 語)
その中間の語 (差が 2.1 以上 3.9 以下の語)	美容師、無意識、不満足、習性、前方、後方、おちいる、同級生、近隣、皇族、こいつ、マネ、ムカツク、変種 (14 語)

ただ、語によっては、日本語教師の間でも、また、留学生の間でも評定値にばらつきが見られるものもあった。日本語教師6名、留学生9名の評定値の標準偏差が2.0以上のものをそれぞれ表3と表4に示す。日本語教師と留学生に共通して評定値のばらつきが見られた語は「ヴィトン」と「カモ」の2語であった。これらの判断が人によって異なった理由は、第三章で詳しく考察する。

表3：日本語教師の評定値にばらつきが見られた語

	1. ヴィトン	6. 準拠集団	17. カモ	21. 前方	22. 後方	31. ご託宣
教師①	1	1	1	7	7	6
教師②	7	3	6	1	1	6
教師③	2	7	1	7	7	5
教師④	7	7	5	3	3	6
教師⑤	7	6	6	1	1	6
教師⑥	3	3	5	5	5	5

表4：外国人留学生の評定値にばらつきが見られた語

	1. ヴィトン	7. 夏目漱石	8. 後天的	15. ガックリ (くる)	17. カモ	19. 金銭を スラれる	28. スタンス	31. ご託宣
留学生①	1	7	5	7	6	7	1	1
留学生②	7	2	2	4	6	7	1	7
留学生③	2	2	5	4	6	6	4	4
留学生④	2	6	2	7	2	5	1	2
留学生⑤	7	1	6	2	1	1	4	4
留学生⑥	1	3	3	5	4	4	7	5
留学生⑦	2	6	1	2	1	4	3	1
留学生⑧	7	1	2	5	5	6	5	3
留学生⑨	1	7	7	1	7	2	7	1

最後に、日本語教師と留学生の評定値の差がマイナスになった語とプラス

になった語を分けて数値の大きい順に表5に示しておく。

表5：評定値の差の大きさ順の語彙一覧

学習者は意味を知らないが、日本語教師は学習する必要があると判断した語 (評定値の差がマイナスの5語)		学習者は意味を知っているが、日本語教師は学習すべきだと判断した語 (評定値の差がプラスの33語)	
1. ヴィトン	-1.2	29. マス・メディア	+5.2
31. ご託宣	-1.1	34. ライフスタイル	+4.8
16. 剥奪	-0.6	26. 属性	+4.4
6. 準拠集団	-0.3	32. アイドル	+4.3
2. せがむ	-0.2	9. オリジナル	+4.2
		5. 欲求	+4.1
		36. マネ	+3.9
		25. 近隣	+3.5
		10. 無意識	+3.4
		18. 習性	+3.3
		23. おちいる	+3.3
		35. こいつ	+3.2
		37. ムカつく	+3.2
		38. 変種	+3.0
		27. 皇族	+2.9
		11. 不満足	+2.8
		21. 前方	+2.7
		22. 後方	+2.7
		4. 美容師	+2.2
		24. 同級生	+2.2
		3. お隣	+1.8
		30. 論調	+1.6
		15. ガックリ (くる)	+1.6
		28. スタンス	+1.5
		12. おしはかる	+1.3
		20. 安らぎ	+1.3
		19. (金銭を) スラれる	+1.0
		13. 暗転する	+1.0
		14. 減入る	+0.9
		8. 後天的	+0.7
		33. 極道	+0.6
		7. 夏目漱石	+0.2
		17. カモ	+0.2

評定値の差（留学生の評定—日本語教師の評定値）がマイナスになったということは、留学生はその語の意味を知らない、あるいは推測できないにもかかわらず、日本語教師が学習する必要性が低いと判断した語ということになる。反対に、評定値の差がプラスになったということは、留学生は意味を知っている、あるいは推測できると判断したが、日本語教師は学習すべきだと判断した語である。表5を見ると、評定値の差がマイナスの語は5個、プラスの語は33個と、圧倒的にプラスの語が多い。また、その差もマイナスの語は最大で-1.2と小さいのに対して、プラスの語は最大+5.2と大きく異なる。

以上が、調査の結果である。その他、質問事項への自由回答は、第三章で結果の考察を述べながら示していく。

第三章 日本語教師による 語彙学習支援の可能性についての考察

本稿は、外国人留学生が専門的な文章の読解において理解を誤る可能性のある語を特定し、学習の必要性を指摘することが日本語教師ができる貢献のあり方であるとの仮説を立て、日本語教師が実際に留学生の理解困難語をどの程度特定できるのかを調査した。本章では、前章で述べた調査結果から、本稿の仮説は正しいのか、すなわち、ある特定の文章の中で留学生がつまづきやすい語を日本語教師が特定できるのかについて、本稿の考察を述べる。そのうえで、専門日本語教育における日本語教師の語彙学習支援の可能性について検討する。

3-1. 日本語教師は学習語彙を特定できるか

第二章で報告した調査結果から、日本語教師の回答と留学生の回答の一致度をどう評価したらよいかをまず考えたい。表5に示したように評定値の差が4以上になった語は、学習者が意味を知っている、あるいは推測できると

回答した語に対して、日本語教師が学習の必要性が高いと判断した語ばかりであった。すなわち、学習者が意味を知らないと答えた語に関しては、日本語教師は高い精度で学習が必要だと正しく予測できたことになる。ただ、留学生が知っていると答えた語の多くについて予測が外れたということはどう解釈すべきだろうか。日本語教師の予測の的中率が低いということになるだろうか。調査協力者の留学生の「社会学入門」の課題に対する回答を見る限り、そうとも言えないのではないと思われる。それは、多くの留学生が全体に語の意味理解に楽観的であるにもかかわらず、文章の読解が必ずしも的確になされていないからである。

- (1) 人によって、その比較の準拠集団、同調の準拠集団に対する物の見方と受け取り方が違うと考える。例えば、他人の幸福の話を聞いて、なんとなく自分が不幸と感じるようになってしまう人もいるが、他人の幸福を見て、自分もなんとなく嬉しく感じるようになる人もいる。私の場合は、親戚の結婚式に行った時、親戚の嬉しそうな笑顔を見て、自分も嬉しくなった。また、自分より頭がいい友達と接して、自分はバカだなと思って、ずっと自分のことを悲観的に考えていて、落ち込んで、頑張る気もなくなる人もいるが、ちょっと落ち込んで、しばらくして、自分も頑張ろうと思って、やる気を出して、精一杯努力していく人もいる。

・・・・・・中略・・・・・・

人間同士って出発点が違うと言っても、ゴールは一緒だと思う。誰でも、満足的に健康的に生活を送られるゴールに向かって頑張っている。ただ、相手が自分より早めに到着しただけ。そういう風に考えれば、自分も努力して頑張ったら、相手のような優秀な人になれると最近私思えるようになった。これも比較の準拠集団のことだけど、良い比較の準拠集団、ポジティブな比較の準拠集団だと思う。他の人を見本にして、自分のやる気を引き出すことは全然悪くない

と思う。

与えられた課題は「あなたにとっての比較の準拠集団、同調の準拠集団について具体例を挙げて述べよ」というものであるが、(1)の回答者は、他人との比較の是非や、他人と自分を比較して自分を向上させる考え方などについて述べている。これらの回答は的外れな議論であり、テキストの文章読解が適切でないことを示していると思われる⁵⁾。(2)に示すようにテキストでは、人間はだれでも無意識に準拠集団に影響される習性を持つため、準拠集団との比較によって人の欲求や思考は形作られるものだ」と書かれている。この文章を正しく読解できていれば、「他人と比較することは悪いことではない」とか「他人の幸福を喜ぶ人もいる」といった主張が、求められた課題に対して的外れであることがわかるだろう。

- (2)「だれかにとって欲求⁽⁵⁾のモデルとなるひとのことを準拠集団⁽⁶⁾と呼ぶ。・・・中略・・・こうして後天的⁽⁸⁾欲求の多くは、自分のオリジナル⁽⁹⁾の欲求ではなく、準拠集団を無意識⁽¹⁰⁾のうちに模倣することによって形成される。ひとはひとまねで欲求を学ぶのだ。」「他人が自分より不幸だと何だか幸福になったように錯覚してしまう習性⁽¹⁸⁾が人間にはある。・・・中略・・・停車中の電車で座っていると、隣の電車が前方⁽²¹⁾に動く自分の電車が後方⁽²²⁾に動き、後方に動く前方に動いているような錯覚におちいる⁽²³⁾が、それときわめてよく似た現象である。あまりほめられたことではないが、ともかくひとはこうして比較のなかを生活している。」

この回答者は、「欲求」「オリジナル」「無意識」「前方」「後方」に7の評価(よく知っている言葉で、意味の理解はまったく問題ない)を、「準拠集団」に6の評価(知っている言葉で、意味がわかる)を、「習性」に5の評価(知っている言葉で、意味はだいたいわかる)をつけている。「おちいる」

については4の評価（知っている言葉だが、意味は完全にはわからない）をつけているものの、それ以外の語についてはほとんど意味の理解に問題がないと判断している。もちろん、文章理解のつまずきの原因は、語彙の不適切な理解ばかりではないが、語彙の既知率の高さに対して、文章の理解の不十分さがあまりにも釣り合わない。この留学生が実際にこれらの語をどこまで理解しているかを測定してみなければ結論付けられないが、留学生が語の意味を知っていると答えたとしても、文章の内容を正確に理解する上で、語の意味理解の深さと広さにおいて十分ではなく、まだまだ学習する余地が残されているということは一般にあり得る。たとえば、(2)の文章の中の「欲求」は、一般的にイメージする「食欲」や「睡眠欲」、「購買欲」のような心理的・肉体的な求めよりも広い意味で使われており、「行動の動機付けとなるもの」を意味する（森下 2000、p.32）。もしこの文章における「欲求」の意味を一般のイメージから自己抑制するべきものという考えを持って読んでしまうと、むやみに他人の物を欲しがめることは良くないから、比較の準拠集団を持つことは良くないことだ」といった解釈に至る可能性がある。そういう意味で、「欲求」という語の一般的な意味を知っていたとしても、文章を誤って解釈してしまう可能性があるため、使われている文脈における意味を指導する意義は十分にあると考えられる。

以上のことから、表5で示した日本語教師と留学生の評定値の差がプラスの数値になった語は単純に日本語教師の予想が外れた語と考えることはできないのではないかとと思われる。すなわち、語の多義性に留学生が気づいていない場合や、語単体の意味は知っていても、ある文脈におけるその語の意味を解釈し誤ることが考え得るため、より深く学習する必要がある場合が含まれていることが考えられる。

3-2. 日本語教師による語彙学習支援の可能性と限界

ここまでで、日本語教師は留学生にとって未知の語や意味を推測しにくい語を高い精度で予測できるという仮説が本稿の調査によって支持されたこと

を確認してきた。

最後に、大学で専門的な学問を学ぶ留学生のために、門外漢の日本語教師にできる支援とできない支援について、特に語彙学習に焦点をあてて考えていきたい。

まず、本研究の出発点となっている、専門日本語教育における学習語彙の特定について、日本語教師ができる支援を考えていきたい。第一章の冒頭で述べたように、専門日本語教育の大きな研究課題は、各専門分野の専門語を特定することである。すなわち、その分野の学術論文や資格試験などに頻出する語を抽出し、リスト化するという学習支援のあり方が先行研究において模索されてきた。本研究は、その支援のあり方を不要だと主張するつもりはない。ただ、当該分野の専門語とされる語彙の学習だけで専門的な文章を正しく理解できるようになるわけではなく、一般語や現代日本社会において共通理解を得ている固有名詞など、日本人学生には問題にならない語であっても外国人留学生にとっては理解につまずく可能性がある語が存在する。そこで、日本語教師ができる支援は、そのような留学生にとってつまずきとなり得る語を予測し、留学生が読もうとしている専門的な文章における一般語の意味や、固有名詞が持つ社会的な意味を指導する役割を担うことだと本稿は考える。

このような支援は必ずしも留学生自身が必要性を感じているとは限らないことも、これまで専門日本語教育における日本語教師の役割が限定的に捉えられてきた原因であるように思う。そのような留学生の意識は本稿の調査においても示唆された。すなわち、「あなたが大学で専門の科目を勉強するとき、難しい点はどんなことですか？難しいと思うことすべてにチェックしてください（複数回答可）」という質問に対して、9名中7名が「専門用語が理解できない」にチェックした。その他、「テキストが難しくて、読んでも理解できない」「先生の講義が聞き取れない」「課題やテストが難しくて、どのように答えたらいいかわからない」にそれぞれ2名の留学生がチェックしたが、それらにチェックした人は全員、複数回答で「専門用語が理解できな

い」とにもチェックしていた。このことから、留学生自身が大学での勉強が難しい原因は専門用語の知識が不足しているからだと考えていることが伺える。そのような留学生は、自分の専門分野において高頻度で使われる「専門語」のリストがあれば、学習の助けになると考えるだろうし、事実、そのような各分野の用語辞典が学習ツールとして求められ、出版されている。しかし、一人の留学生が「その他」として回答しているように、「単語の意味が一つずつ分かるのに、一文を読むと、意味が理解できなくなってしまうことが多い」という問題もあり、文脈における各語の意味の適切な捉え方も学習する必要がある。そこで本研究は、専門日本語教育においても、ある特定の分野のテキストや論文を読解するための語彙指導は日本語教師にできる支援であり、留学生がつまずきやすい語を予測できる日本語教師が担うことに意義があると主張したい。

ただし、一般の日本後教育における語彙指導をそのまま専門日本語教育に移行できるとは考えていない。一般の日本語教育における語彙指導、あるいは読解指導における語彙の説明では、その学習語彙の知識の汎用化を期待して行われることが多い。日本語教師に対して行った調査で、「あなたは、大学学部留学生を対象とする日本語読解指導において、語彙リストを作成する際、どのような方法で、または、どのような基準で語彙を選択しますか。(自由記述回答)」という問いに対し、2名の日本語教師から「汎用性の高さ」を基準に語彙を選択するという回答があった。確かに忙しい留学生にとって限られた日本語学習の機会を最大限に有効活用できるものにしたいという思いから、学習させる語彙は、その授業で扱った文章の読解に役立つだけでなく、日常的な日本語使用に使えるものであるべきだと日本語教師が考えることも当然である。しかし、伊藤(2014, p.25)が指摘するように、「何らかの専門分野を持つ日本語学習者にとって日本語で書かれた文献の内容をいかに早く読み取れるかが大きな課題」であって、その目的に特化すれば、学習すべき語を「汎用性」を基準に選ぶことはできない。たとえば、今回の調査で用いた(3)の文章の中に「ヴィトン」という固有名詞が出てくる。留学

生にとって「ヴィトン」が汎用性のある語であるかを考えると、個人差はあろうが、日常生活でも大学での学びにおいても使用頻度が高いとは考えにくく、「汎用性」の観点から学習すべき語としての優先度は低くなるだろう。しかし、(3)の文章で「友達はみんなヴィトンなんだから、私にも買ってよ」という文が理解できなければ、準拠集団という概念を適切に捉えることができない。つまり、専門日本語教育における学習語彙選定では、学習者が読もうとする文献の読解にとって必要な学習語を優先的に選定することが必要となるのである。

- (3)「友達はみんなヴィトンなんだから、私にも買ってよ」と親にせがむ娘。「お隣の奥さん、素適な指輪してるのよ。私も欲しいわ」と夫にねだる妻。「(人気歌手の)○×△みたいにやってよ」と美容師に注文する青年…。

「友達」や「隣の奥さん」や「○△×」みたいに、だれかにとって欲求のモデルとなるひとのことを準拠集団と呼ぶ。

表5で示したように、「ヴィトン」は留学生と日本語教師の評定値がマイナスになった語、すなわち、学習者は意味を知らないと回答し、日本語教師は学習する必要がないと判断した語の中に含まれている。また表3、表4に示したとおり、「ヴィトン」を学習語に加えるべきかどうか日本語教師の間でも判断が分かれ、評定値にばらつきがあった。その判断のばらつきは、学習者が知っている語かどうかの判断が人によって異なったというだけではなく、汎用性の面から学習語に加えるべきかどうかの判断が異なったことが影響していると考えられる。今回の調査でカタカナ語（外来語）は全般的に評定値が低かったが、例外的に「ヴィトン」は評定値が高かった。「ヴィトン」以外のカタカナ語「オリジナル」「スタンス」「マス・メディア」「アイドル」「ライフスタイル」の5語の平均評定値は2.3とかなり低かった。和語の平均評定値が6.6、漢語が6.2、全体の平均評定値は6.5であったことから、今

回の調査協力者の日本語教師はカタカナ語の既知度を低く見積もっていたことがわかる。それに対して「ヴィトン」の評定値は4.5と飛びぬけて高かった。これは「ヴィトン」は学習者が知っている可能性が高いと判断したというよりも汎用性の面から学習の必要性が低いと考えたことが推測される。今回の調査では、学習語として語彙リストに加える必要性が高いかどうかという判断を課しているため、学習する必要はあるが、語彙リストに加える必要はないという判断があり得る。そのため「ヴィトン」のような固有名詞については語彙リストに加える必要はないと考えた人がいたため、ばらつきが生じたと考えられる。「あなたは、大学学部留学生を対象とする日本語読解指導において、語彙リスト作成以外で、学生の学びにとって重要だとお考えのことは何ですか。(自由記述回答)」という質問に対して、「地名・人名・企業名などの固有名詞」の学習という回答があったことから、日本語教師の中には「固有名詞」は語彙リストに加えるものではないが、文章の読解にとって重要な学習項目となると考える人がいることが伺われる。しかし、もし指導対象の留学生が共通して読むべき文献が特定できるのであれば、その文献の読解に必要な語かどうかという基準で学習語彙リストを作成し、指導に活かすことが専門日本語教育における語彙学習支援の近道になると言えるだろう。どのような場面でも「汎用性の高い語彙」を指導しようとする考え方では、やはり限界が生じてしまう。日本語教師が専門日本語教育における語彙学習支援を担うためには、一般の日本語教育における語彙指導の考え方から離れる必要がある。一般日本語教育の経験は留学生の専門学習の支援においても大いに役に立つことは、本稿の調査で日本語教師による学習困難語の予測の精度の高さが示されたことで確認されたと言えよう。しかし、一般日本語教育において汎用性の高い語を指導するのと同じように、専門日本語教育においても日本語教師が汎用性が高いと考える語彙の学習を求めることは、時として有益な支援とはならないことを理解するべきである。

第四章 まとめと教育現場への提言

本稿は、専門日本語教育における語彙学習支援において日本語教師が貢献できることは何かという疑問を出発点に、日本語教師は経験に基づいて学習者の未知語を予測することができ、その予測力が専門日本語教育でも活かせるという仮説を立てた。そして、日本語教師と大学学部留学生に対する調査によって、日本語教師が予測する未知語あるいは理解困難語と実際に留学生が意味を知らない、あるいは意味を推測できないと答えた語が高い精度で一致することを明らかにした。それにより、学部留学生が日本語で書かれた専門的な文章を読解する際に理解のつまずきとなる語を日本語教師が的確に予測し、指導することで文章読解を促すことが、日本語教師にできる専門日本語学習の支援のあり方であると主張した。最後にまとめとして、本研究から得られた知見に基づいて、大学における日本語教育の現場に対する提言を行いたい。

まず、筆者が所属する亜細亜大学国際関係学部には幸いなことに、当該学部の留学生専用の日本語科目が設置されており、国際関係学部の学生が読むべき文献を特定することが可能であったため、本稿で報告した調査のように、その特定の文献を読むための学習語彙を日本語教師が選定し、指導する機会を持つことができている。本稿が提案する語彙学習支援のあり方は、そのような特定の文献を題材に指導することができる環境がなければ実現しない。多様な専門を持つ留学生が一つの日本語科目を履修し、その科目において語彙学習支援を行うという場合には、効果的な学習語の選定も指導も難しく、特定の文献を読むための即効性のある語彙学習支援は行えない。

そこで、大学学部留学生のための学習支援のためには、少なくとも1科目、学部ごと、あるいは専門分野ごとの日本語科目を設置することを提言したい。そして特に、専門的な学修の初期段階にある留学生を対象として、特定の文献を日本語教師が留学生とともに読み、一般語の専門的な意味づけや、日本文化・日本社会についての知識がなければ理解しにくい例示を解説

することによって、留学生の専門学修を支援する機会を設けるべきだと考える。

そのような支援のあり方は、同じ分野の留学生の先輩が後輩に行っていたことかもしれない。しかし、新型コロナウイルス感染拡大以降、先輩後輩や同級生同士のつながりが希薄となり、先輩や同級生からの支援が期待しにくくなった。また、日本文化・日本社会についての知識では圧倒的に優位な日本語教師が留学生の文化・社会との違いに配慮しながら語彙学習支援をすることができれば、留学生にとって「かゆいところに手が届く」指導が受けられることになる。そのような意味で、専門日本語教育において効果的な指導をするためにも、日本語教師は常に学習者の文化・社会について学び続け、留学生にとって理解しづらい日本社会の共通認識について敏感にならなければならない。

以上が大学における日本語教育のあり方やその教育を担う日本語教師に対する本稿の提言である。

第五章 今後の課題

本稿は、「社会学入門」のテキストの読解のための語彙学習支援において日本語教師が貢献できることは何かという疑問を出発点として、日本語教師が学習困難語を予測することができることに貢献の可能性を見出せると結論付けた。ただし、本稿の調査はごく限られた範囲において日本語教師の予想する困難語と学習者の未知語の一致という現象が見られたにすぎない⁶⁾。それでも、日本語教師による専門日本語教育への貢献度の限定性を強調する研究の多い専門日本語教育学研究の中で、一定の成果を上げることができたとも言えるだろう、ただし、実際に本稿が示した形の語彙学習支援の実行可能性と有効性を実証する研究が今後必要となることは間違いない。追加調査として必要となるのは、留学生が特定の文献の読解において失敗した場合に留学生にインタビューを行い、そのつまずきの原因が専門用語の知識不足によ

るのか、一般語の理解の不十分さや文化的背景の違いが原因になっているかを検証する必要がある。その上で日本語教師が特定の文献における一般語の意味や解釈について解説することによって読解が促進されることを実験的に検証することも必要である。また、そのような支援を日本語教師こそが担うべき役割と位置付けるには、一般の大学教員との比較調査が欠かせない。以上のような追加的な研究によってはじめて、本稿が報告した日本語教師の未知語予測能力が大学学部留学生に対する語彙学習支援に活かせることが明らかになるだろう。

注

- 1) 伊藤（2014）は、国際交流基金関西国際センターの文化学術専門家日本語研修における専門語彙の授業実践を報告するもので、研修参加者はそれぞれ必要とする専門語彙が異なっていたことが報告されている（p.25）。そのような環境では、同じ文献を読ませる授業形態が取れないため、本稿が提案するような日本語教師による語彙学習支援は行えない。本稿は、異なる専門を持つ学習者を一つのクラスで同時に指導する環境においては教師主導型の学習よりも自己主導型の学習のほうが効果的であるとの伊藤（2014）の主張に反論するものではない。本稿は、第二章以降で述べるように、同じ文献を題材に日本語指導を実践できる環境があることを前提としている。
- 2) 筆者は、2021年2月5日に田部井圭子教授に聞き取り調査を行い、田部井先生が実際にお作りになった授業資料を見せていただいたり、学生の反応などをお聞きした。実際に田部井教授の授業を受講した留学生から「社会学入門」の講義の内容がわかるようになったといった声や課題を行う上での助けになったという声があったというお話を伺い、日本語教師による専門日本語教育のあり方を考えるヒントが得られた。
- 3) この事前学習リストは、当該授業担当教員の亜細亜大学国際関係学部教授栗原孝氏から直接提供を受けたものである。当時、新型コロナウイルス感染症拡大の始まりの時期にあり、それぞれの教員が独自に工夫をして、大学での学びの質を保つために教材開発に追われた時期であった。提供いただいた事前学習リストはそのような工夫の産物であると言える。
- 4) 本調査を行った時期は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、対面での調査が難しく、調査協力者の確保も調査の実施方法も理想的な形では行えなかった。したがって第五章で述べるように追加的な調査を行う必要はあるも

の、日本語教師による専門日本語教育の可能性と限界というテーマはまだ研究の蓄積が少なく、明らかになっていないことが多くある中で、日本語教師の未知語予測の可能性の検討は、一つのステップとして一定の意義があると考えた。

- 5) 他の調査協力者の回答の中にも「小学生の頃から今まで、頑張っている両親のようになりたいです」といった外的な回答が見られ、テキストを読んで「準拠集団」という概念を適切に捉え、自分自身の小学生の頃の比較の準拠集団の例を挙げるという課題は今回の調査協力者の留学生にとって容易ではなかったことが伺われる。
- 6) 「限られた範囲の検証」であることは筆者自身が認めるところであるが、査読者の先生からも①題材として選択したテキストの特殊性、②分析対象としたテキストの分量と語彙数の少なさ、③調査協力者の少なさから、数値的な検証というには限界があるとの指摘を受けた。まったくその通りの指摘であり、今回の結果をもって、日本語教師が専門教育へ貢献できることを証明したとは到底言い難い。しかし今後の研究で、さらに精度の高い検証方法を考え、第5章で述べたような様々な検証を加えることで、本稿の仮説の証明を目指したい。

参考文献

- 伊藤秀明 (2014) 「専門日本語教育における自己主導型学習の可能性—学習者による「私の「専門語彙の抽出とリスト化」」『専門日本語教育研究』第16号、pp.23-28.
- 今村和宏 (2014) 「社会科学系基礎文献における分野別語彙、共通語彙、学術共通語彙の特定一定量の基準と教育現場の視点の統合—」『専門日本語教育研究』第16巻、pp.29-36.
- 岩田一成 (2014) 「看護師国家試験対策と『やさしい日本語』」『日本語教育』158号、36-48.
- 加藤敬子 (2017) 「なぜ経済連携協定 (EPA) 看護師候補者たちは看護師国家試験で誤答を選んだのか：日本語教育からのアプローチ」『人間社会環境研究』第33号、pp.31-46.
- 小竹直子 (2017) 「学部1年生の留学生が読む専門書の読解に必要な日本語文法—経営学の入門書の文型調査を通して—」『愛知産業大学短期大学紀要』第29号、pp.31-46.
- 小宮千鶴子・横田淳子 (2002) 「専門連語による専門語の自習教材の開発—経済分野を例に—」『日本語教育方法研究会誌』第9巻2号、pp.12-13.

- 小宮千鶴子 (2005) 「日本語教育のための経済の専門連語—概論教科書と新聞の比較を中心に—」『早稲田日本語研究』第13号、pp.1~12.
- 小宮千鶴子 (2017) 「理工系留学生のための数学の基礎的専門語」『日本語教育方法研究会誌』第23巻2号、pp.4-5.
- 小宮千鶴子 (2018a) 「留学生のための化学の基礎的専門語」『専門日本語教育研究』第20巻、pp.43-48.
- 小宮千鶴子 (2018b) 「留学生のための物理の基礎的専門語」『早稲田日本語研究』第27号、pp.37-48.
- 佐野彩子 (2016) 「企業の年次報告書を用いたビジネス分野の外来語に関する一考察—アカデミックジャパニーズ、白書、新聞語彙との比較を中心に—」『専門日本語教育研究』第18巻、pp.37-42.
- 中川健司・齊藤真美 (2014) 「介護福祉士国家試験におけるカタカナ語の特徴」『専門日本語教育研究』第16巻、pp.73-78.
- 野田尚史 (2014) 「上級日本語学習者が学術論文を読むときの方法と課題」『専門日本語教育研究』第16号、pp.9-14.
- 野村愛・川村よし子 (2011) 「介護福祉士候補者の自律学習支援のための語彙リスト作成」『日本語教育方法研究会誌』第18巻1号、pp.14-15.
- 野村愛・川村よし子・齊木美紀・金庭久美子 (2011) 「単語難易度と出題頻度に配慮した介護福祉士候補生のための語彙リスト作成」『日本語教育方法研究会誌』第18巻2号、pp.12-13.
- 松下達彦 (2017) 「語彙リストの利用法—コーパス分析に基づく語彙研究は何を目指すべきか—」『専門日本語教育』第19号、pp.19-24.
- 水崎泰蔵 (2015) 「日商簿記検定試験3級出題文の漢字語彙—過去問から抽出した語彙の学習優先順位判定に関する考察—」『専門日本語教育研究』第17巻、pp.47-52.
- 森下伸也 (2000) 『社会学がわかる事典』日本実業出版社.
- 山元一晃・稲田朋晃・品川なぎさ (2020) 「日本語教育で扱うべき語の選定のための医学用語と一般語のはざまの語彙の分析」『日本語教育』第175号、pp.80-87.

【謝辞】

この研究を行うにあたり、亜細亜大学国際関係学部教授の栗原孝先生、田部井圭子先生には、さまざまなご協力をいただいた。栗原先生には実際に授業で使用されている自作の教材をご提供いただき、田部井先生には留学生のための専門科目への橋渡し教育の実践例を教えていただいた。お二人の先生のご協力なくして、この研究は成し得なかった。ここに記して、敬意と感謝の意を表したい。

A Comparative Study of Vocabulary Learning Selection by Japanese Language Teachers and Words Unknown to International Students Based on the Text of “Sociology” Written in Japanese

Naoko KOTAKE

This study assesses the extent to which Japanese language teachers can support international students’ learning in university faculties. Previous studies have identified limits to how much Japanese teachers can contribute to specialized vocabulary learning. However, some more recent studies have also revealed that Japanese learners often do not understand specialized content due to a lack of general vocabulary, not just a lack of specialized vocabulary. Therefore, this study conducts the following two surveys.

This research extracts vocabulary from one passage of sociology textbook and asks Japanese teachers and international students to evaluate whether these words are necessary for learning vocabulary.

The results identify many cases where Japanese teachers respond that words known by international students must be learned, but few cases in which Japanese teachers judged those words not known by international students need to be learned. This suggests that Japanese language teachers predict words that international students will have trouble understanding with high accuracy.